
目には目を、竜には竜を！

宮座頭数騎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

目には目を、竜には竜を！

【Nコード】

N2422P

【作者名】

宮座頭数騎

【あらすじ】

竜になってしまったヘタレな主人公は、魔女との出会いをきっかけに変わりゆく。これは始まりの物語。

起（前書き）

企画小説による投稿作品です。『言の葉同盟』と検索すれば他の投稿者の作品も読めるようになってますので、そちらもよろしく願います。

起

迫り来る黒い影、刃を模したそれが隙間狭しと大量に、僕に目掛けて放たれた。

「きますわッ！」

彼女の緊縛した声が耳元で響く。

「躲しなさい！」

「うんッ！」

僕の頭の上で悠然と佇む彼女が命令を下す。僕もあの影に切り刻まれるのはゴメンだ。だから彼女に同意し、左右上下かつ縫うような動きで切り抜けて行く。

「距離が詰まりましたわね。ここが正念場よ！」

「よし！」

脅威を抜き去った後に、元凶が視界に現れた。僕よりも一回り大きなその巨体。漆黒のボディ。赤く染まった瞳は、狂気を含んで僕を睨み付ける。

「組み付きなさい！」

「もちろん！」

翼を力強く羽ばたかせ、加速のベクトルを上げて僕は突っ込む。目の前で身構えている黒いドラゴンへと。

『オオオオッ！』

甲虫のような滑らかさと角張りを見せるその胸元を貫く勢いで、全身の重量を載せた右拳を放つ。

直撃——めり込みはしたが、貫くには到らなかった。だから先ほどの指示通りそのまま組み付き、僕はドラゴンを押して急降下を始める。

地面ギリギリのところまで切り離し、僕は空へ舞い上がり、ドラゴンは山の地形へと叩き落とす。地響きがこの空間一帯に広がる。

「効いたかな？」

空中で翼を軽く動かし、場を維持して僕は問い掛けた。

「いいえ。決定打にはならないですわ」

彼女の言葉通り、ドラゴンは生存を露にしていた。巻き上がる土煙の中から赤い眼光が妖しく浮かぶ。土煙の晴れゆくなか、奴の鋭い歯が並ぶ大口の手前で、赤黒い粒子が集束されていくのが見えた。

「マズいですわね。最大の一撃を放つ気ですわ。しかも——」

狙いを町に定めている。こいつ、みんなのいる町にそれを放つ気か。くそっ、そんなことさせないぞ！

「ブレイブ、何を考えていますの！ その位置は奴の攻撃軌道上よ！」

下降して大地スレスレで僕は停止した。この後ろには、僕の友達が暮らす町があるんだ。

「だから僕が、守る！」

「あなた。まさか迎え撃つ気！」

黙することで、僕は肯定の意を示す。

「無茶はおよしなさい！ あなた一人であれを防げは——」

「マリンさん言っただじゃない。あなたは、僕を死なせないって。一緒に戦ってくれるって」

「あなた……」

僕はそれ以上の返答はせず、奴に目を凝らす。逃げたくないから、負けたくないから。正面から相手をする為に、ただ身構えた。僅かに沈黙が過ぎて、彼女から呆れの溜め息が漏れ、僕の耳朶に触れた。

「フフ。確かに、私はそう言いましたわね……解りましたわ。私のもてる限りの魔力を、あなたに分け与えましょう」

優しく、彼女は微笑んだ。次に彼女は両手を大空へと広げる。彼女の身体から、淡く白い光が浮かぶ。魔力の光が、彼女の足下を伝って僕の身体へと流し込まれて行く。

力が湧いてきた。これなら、やれるかもしれない。

『いくぞッ!』

気を引き締めて、僕も正面のドラゴンと同じく、深呼吸の要領で魔力を口元に集束を開始した。奴の一撃に対抗する為に。

呼応するかのようになり、大地が震え出す。魔力の影響が、僕を中心に波紋状に歪みが広がる。黒いドラゴンの方では魔力の影響で、大地に散らばる小さな岩がふわりと浮き、口元のエネルギーの塊に吸い込まれて粉々に砕かれていく。

一触即発——勝負を決める瞬間が訪れようとしていた。

思えば、これが僕の戦いの始まりだった。僕は今まで何も知らずに、ただ自身の運命と不幸を嘆いて生きて来た。

彼女と出会うまで、何も気付けなかったんだ。だから、彼女との出会いは、僕にとって最高の幸せだったのかもしれない。

僕の物語を、ほんの少しだけど。語らせてほしい。そう、始まりの物語を——

この黒いドラゴンとの戦い。事の顛末を語るとすれば、それは数時間前に遡る。

僕は、リードタウンという閑静な町に住んでいた。『住んでいた』という過去形なのには理由がある。

三年前の事だ。当時の僕は十二歳で、父と二人で暮らしていた。

母は僕を産んで力尽き、お父さん一人で僕を育ててくれた。けれど、そんなお父さんも過労で倒れ、拍車が掛かり病気で帰らぬ人となった。

大切な人の喪失と、自身の存在が両親殺してしまったという罪の意識に僕は苛まれ、それが限界を越えてしまったのだと思う。

お父さんの死という現実を突きつけられたこの日。僕の心の中で何かが崩れ落ちた。

形容できない熱いモノが僕の中で解き放たれ、気が付けば、僕は人ではなくなっていた。足下を見れば崩壊した自宅。空を仰げば冷たく蔑むように降り注ぐ雨。そして見渡せば息を切らせて僕を見上げる見知った顔ぶれ。

自分の手を見て初めて気付いた。僕の手が、クマのように太く、シャチのように滑らかなモノに変わっていることに。

自宅を瓦礫に変えたのは僕自身。僕は、コウモリに似た翼と鋭い牙を持つ竜となっていた。

何故だか解らなかった。解らないから怖かった。みんなの恐怖と困惑に包まれた顔を見て、胸が押し潰されそうになって。だから僕は逃げ出した。

翼を広げ、森の中へ。湖が近くにある、山へと続く洞窟の中へと。そして永遠と想われる長い時間、僕は泣き続けた。

どうしてこんな目に逢うのだろう。どうして僕は何もしてないのに、みんなに迷惑を掛けてしまうのだろう。悔しさと自責が刃となり、僕の心をズタズタに切り裂くから。それが痛くて、僕はまた泣き出した。

雨が晴れて、泣き疲れた僕は洞窟から出た。差し込む光の先に、

二人の男女が佇んでいた。親友のクルーゼとエミリーが。

二人は、怪物と化した僕を偏見なく、怯えた様子もなく、親友として接してくれた。嬉しさのあまりに涙が溢れたのは今でも覚えている。

二人から、僕の身に何が起きたのか、逃げ出したその後はどうなったのかを聞いた。

僕は、お父さんが死んだ後、泣きながら発狂を思わせる叫びを上げて竜の姿へと変貌を遂げてしまい、その後も泣き続けていたようだ。後は僕自身の知る通りの流れだ。

みんなは感じ取ってくれていた。僕の悲しみを、恐怖を察してくれた。だから町で僕の討伐の話が流れても、みんなが上手く『飛び去って行方知れずになった』などと、いろいろと隠蔽してくれて、僕は森の中でひっそりと暮らすことで収まりが付いた。

「よお、ブレイブ！」

「元気にしてた？」

週に二回。親友の二人は、必ず来てくれる。

『元気にしてたよ』

寝そべりながら湖を眺めていた僕は、二人に振り返って微笑んだ。と言っても、口を開けちゃうと歯が剥き出しになって、それが噛み付こうとしている様に見えるから、目で感情を示すように心掛けでいる。僕の顔って、どこかシャチャサメに、いや、鳥のクチバシを象った感じかな？　なんか似てるんだよね。それと側頭部には立派な二本角が後ろ向かって生えてて、八重歯の代わりに太い牙が口の端から突き出てる。

湖に写る自分を見て、容姿を知ることが出来たんだ。

「食べ物持ってきたよ」

エミリーが言って、背負っていた大きな袋と、両手に持つ果物いっぱいフルーツバスケットを。クルーゼの方はここまで引いて来た荷車から保存食を下ろしていく。

『無理しないで。食料は森や湖から採れるから大丈夫だよ』

「ばーか。お前自分のサイズ考えろよ。俺達がこうして時折持つてこねえと、お前痩せちまうか、この辺の食い物無くなっちまうだろ」

『う……ごめん』

こんな重い荷物を持って、僕の為に運んで来てくれるのは嬉しいけれど凄く自分が情けなくて、申し訳ない気持ちになる。それでも僕はその想いも打ち明けられず、ただ謝るしかなかった。

「気にすんなよブレイブ」

「私達がやりたいからやってるのよ。謝ることじゃないわ」

「それに歯痒いのは、俺達の方さ。お前がこんなに苦しんでるのに。俺達は、こんなことくらいしか出来ない」

クルーゼは眉間に皺を寄せて、沈鬱な表情を下に向けた。エミリーもまた悲しげにクルーゼの背中を見て、拳を握り締めている。

こんなこと……なんかじゃない。僕がみんなにしてもらっていることは、こんなことじゃなく“こんなにも”助けてもらっているんだ。

僕なんかの為に。

本当は、生きててごめんなさいと謝りたいくらい、みんなには謝罪の気持ちでいっぱいなのに。

『ありがとう』

今日も僕の口からは、この一言だけしか出なかった。

「じゃあな。また来るから」

「今度はお菓子も持って来るね!」

『うん……また』

お互いに手を振り合い、別れを告げる。もう、来なくて良い。二人が苦勞する必要も、苦しむ必要もないのだからと。そう伝えたい反面、心の奥底で孤独は嫌だと、また来てほしいと、矛盾めいた醜い願いを祈る自分がいた。

他者を氣遣う良心と、自分は救われたいと願う欲望が交錯を繰り返す。三年間。嫌、生まれた時からずっとこの想いに悶え苦しんでいる。お母さんは僕を産んだ所為で命を落とし、お父さんは僕を養おうと人の倍働いたから、無理が祟り帰らぬ人となった。

そして今、親友が両親と同じように、僕の所為で苦しんでいる。何で優しくしてくれるのだろう。いつそのこと、憎しみをぶつけて僕を消してくれば良いのに、みんな僕を生かそうとする。救おうとしてくれる。僕は何もしてないのに、何も出来ないのに。

優しさが痛いよ。苦しいよ。

辺りを見渡しても、僕の求める答えはどこにも無い。広がる湖と、囲むように広がる森と、山のみが視界に入る。今日もまた、僕は雲が流れ行くこの景色を眺めるだけなのか。

そう思っていた。

「見つけましたわ」

彼女が僕の前に現れるまでは。

「あなたが、ブレイブ＝ロードレインね」

承

僕の名前を呼ぶオカリナの音色のように澄んだ声。見れば最初に視界へ入ったのは、紫色のフリルが付いたパラソル。その下に佇むのは、黒を基調とした高価なドレスを身に纏う女性だった。僕でも目を奪われる程、スタイルの良い身体をしている。

華やかな帽子をかぶり、シャギーに整えられている淡い紫の髪が、光の反射できらきら輝く。銀色の瞳に僕を映し出し、艶光る紫色の唇——悪趣味な口紅を塗っているな——に細い指先をなぞらせて、彼女はにっこり微笑む。切れ長の目に、長い睫に細い眉。大人びた顔立ち。淑女というよりも、魔女という印象を植え付けてしまうこの人は、いったい誰なのか。

『おばさん。誰？』

「お、オバツ！」

薄化粧とはいえ、滑らかな白い肌を持つ彼女は、頬をピクピクひきつらせた。

「失礼な子ねツ！ 私はまだ三十よ！」
わたくし

三十って、もうおばさんじゃないか。

「何か言った？」

顔に書かれていたのだろうか。見透かされた思考を問い掛けられ、僕は威圧的な彼女の態度に思わずたじろいでしまった。

「まったく……良いこと。私のことはおばさんではなく女王——ゴホンッ！ 御姉様とお呼びなさい！」

「は、はい」

両手を腰に当てて、僕を睨む彼女。というか今、おぞましい事を言いかけてなかった？

いや、それよりも。

『あの、おばさん』

「御姉様よ！」

『あ、はい。お姉さんはいったい何者なんですか？』

「あ、そうでしたわ。私としたことが。名乗るのを忘れてましたわね。というか、御姉様と呼べと言ってるだろうがあッ！」

いきなりクワツとオーガの形相と化すれば、彼女の憤怒に呼応するかのように、雨雲すらない空から落雷が大地へと突き刺さった。

『ひい！』

ま、魔法使いだっただのか！

『ご、ごめんなさいお姉さん！』

頭を覆い隠して地面に伏した僕が余程惨めに見えたのか。先程の怒りはどこへやら、彼女は溜め息混じりに手を額に当ててかぶりを振るう。

「ああもう、お姉さんで良いですわ。いい、よくお聞きなさい。私の名は、マリン。マリン＝メイア＝オルゲイツよ。はい、復唱！」

「えっと、マリンメイアオルゲイツさん？」

「ちよつとなんですそののだらしのない呼び方は！ もっとシャキツとビシツとスパーンとお呼びなさい！」

そんな無茶苦茶な……ん？

『オルゲイツって確か……貴族の？』

「へえ、意外ですわね。こんな辺境の地でもオルゲイツの名が知れ渡っているなんて」

僕がまだ人だった頃、学校で先生から習った覚えがある。この力リメア国で百年前に名を馳せた軍事貴族オルゲイツ家。

一時期の間、他国からの侵略が頻発だった頃だ。オルゲイツ家は魔法と剣術の両立した戦士、魔法騎士^{マジックナイト}を生み出したのを始めに多く

の戦術と兵器を考案し、これが戦争を終結に導く要となり、大きな功績を残した。しかしオルゲイツ家の飽くなき軍事力強化の追求と、その姿勢にクーデターの恐れを抱いた王室は、オルゲイツ家を弾圧。『それで確か他にもいろいろあって、結局オルゲイツ家は没落貴族

に――』

などと言いかけた刹那、彼女が目にも留まらぬ速さでパラソルからサーベルを引き抜き、僕の目玉ギリギリに突き付けた。いや、それ以前に仕込み傘だったのそれ！

「今度没落貴族などと口にしたら、目玉くり抜きますわよ」

こ、殺される！

戦慄した。眉間に凄じ皺が集まって、まるで威嚇する狼の顔だよ。青筋がこめかみから浮き出てるし、明らかにキレ掛けているよこの人。

『ごめんなさい。本当にすみませんでした！ 勘弁してください！』
あうう、ずっと目を開けているのもあつてか、目許から涙が溢れてきた。それに少しちびっちゃった……。

「まったく、失礼にも程がありますわね」

機敏な所作で鞘代わりのパラソルにサーベルを収納するマリンさん。この人、剣術にも長けているのだろうか？

いや、それ以前にオルゲイツ家は元は軍事貴族だし、全員が魔法騎士の可能性があるよね。となると、この人もそれか。

「いろいろと話が逸れてしまいましたわね。さっそくですけど、用件を申しますわよ」

咳払いをして、パラソルを開いたマリンさんは横目にして僕を見た。

「私と共に、竜退治の旅に出なさいな」

え、いきなり何を言うんだこの人は？

「あなたの力は、そうする為にあるものなのよ」

『力って、今の姿のこと？』

僕が自分を指差して問い掛けると、彼女は再度呆れの溜め息を漏らす。

「それ以外に何がありますの？」

いや、でも僕の姿って、竜になる呪いか、または本当は竜だったのに人間の姿になる呪いに掛かっていたとかなんじゃ……。

「何も分かっていないようですわね。判りましたわ。まずはちよっ

とした昔話から話すとしましょう」

約三百年も過去の事だ。

突如天を切り裂き、巨大な竜が現れた。狂暴かつ凶悪な竜は、各地で散らばって暴れ廻り。生命を貪り尽くし破壊を繰り返した。各地に生きる種族達は退治に死力を尽くすも、竜の圧倒的な力の前に惨敗をきしてしまう。

人類が絶望に跪いたその時、天から神様が現れ、竜に対抗する力と封印する為の神具を授けてくれた。

力を得た戦士達は各地で暴れている竜を着実に倒し、封印を施して事態を鎮静化。斯くして人類は絶滅の危機を回避できたのだった。

「その後、神から授かった力は子孫に受け継がれました。あなたには、その力が受け継がれている」

僕にそんな力があつたなんて、でも。

『竜って昔の英雄達に退治されたんだよね？』

だったら何で僕がドラゴン退治の旅に出ないと駄目なの？

「決まっているでしょう。竜が復活したからですのよ」

『え？』

「話はまだこれからよ。この話は、三百年前の話とオルゲイツ家の没落秘話へと繋がる話ですわ」

元々オルゲイツ家は、その神の力を授かった英雄達の一人、バン・ロードレインの旅に同行をしていた凄腕の魔法使いらしい。英雄達はそれぞれ独特の能力を得ていて、同行したその英雄ロードレインの力は、竜に変身する力だった。

戦いの旅を終えたオルゲイツとロードレインは別れ、ロードレイ

ンは自然と共に生きる道を選び、オルゲイツは自国に貢献して貴族となり、人々の為に政策に携わっていた。

それから二百年近く経った頃、侵略国を撃退している最中、軍事貴族となったオルゲイツ家は世界の異変にいち早く気付いた。

封印が解け始めているという事態に。

重く見たオルゲイツ家は、ロードレインを含めた英雄達の血を引く子孫の行方を搜索しつつ、竜への対抗策を練っていた。だが、そのオルゲイツ家の行動を快く思っていなかった他の貴族は、反乱のデマを流して王族に不満を与えてしまう。

過去の事実を語ったオルゲイツ家の言葉も王族の耳には届かず、二百年も昔の、それも公にもなっていないこの事件を、空想物語として片付けられてしまう始末。

最終的にオルゲイツ家は狂人の集まりの鷹派貴族と、忌むべき一族と蔑まれ、弾圧されてしまった。

「世界を見ることがもせず、昔から狭い領土で閉じこもった国は何も知らない、知ろうともしない。けれど、世間にどう罵られようと、オルゲイツ家はこの世界の為に力を付けましたわ。滅びの日から世界を守るために」

マリンさんの引き結んだ唇から、一滴の血が零れ落ちた。きつと今まで歩んできた辛い出来事を思い出しているのだと思う。僕も人間だった頃は、よく周りの人に苛められた。けれど助けてくれる友達がいまし、次第にみんなと分かり合えて親しくなっていた。

でも彼女の方は家族以外の味方も、友達もいなく、僕の数倍の苦しみを味わったに違いない。その悔しさは、苛められた程度の僕では到底理解は叶わないと思う。僕が彼女に同情する権利はどこにも無い、だから言葉は掛けず、僕は黙って見ていた。

「ブレイブ」

瞳を閉じて彼女は、穏やかな声で僕を呼んだ。

「竜は、既にこの地で目覚めていますわ。あなたの祖先であるロードレインが弱らせ、オルゲイツが封印した竜が」

彼女の言葉が合図とばかりに、唐突に大地が揺れ出した。森がざわめき、小鳥達が空高く町の方へと飛び去って行く。まるで、震源地であつた山を恐れているかのように。

「どうやら、時は来てしまったようですわね」

彼女が睨む先は、一番高い山の山頂付近。町では誰も近づいてはいけないと言い伝えられていた場所だ。確か、人に危害を加える危険なモンスターが巣を作っているって……まさか！

「そのまさか……ですわよ」

僕は思わず息を呑む。彼女は彼女で怒りとも不安とも取れる表情で、ジツと山に目を凝らす。地震は次第に大きくなり、揺れが限界に達したその時、山頂で火柱が立ち上る。耳を劈く程の爆発が、激しい突風を生み出した。

「うわっ！」

頭を覆い、突風に乗って襲い来る石飛礫から僕は身を守る。マリオンさんも手を前に出して魔法の結界を張り、悠然と佇む。何とまあ、便利な魔法だ。

いや、そんなことよりも山の方だ。キノコ雲が出来ているけど、どうなつて……山頂が、ぼっかりと無くなっている。

今度はその山頂付近で轟然とした獣の咆哮が響き渡った。そして、煙の中から黒い影が現れた。

「アレですわ」

彼女が空を飛び回る鳥のようなシルエットの影を指差し、それを僕は注視した。その正体は、赤い眼光をギラつかせ、一角が突き出たひし形の頭をした、コウモリの翼を模した竜。甲虫じみた肌——と、呼ぶべきか？——が、鎧の竜を印象付ける。

体形が僕にそっくりだ。四足で立つのではなく、二足歩行。両の

手は足よりも大きくて、鋭い鉤爪が付いたハンマーを想わせる攻撃的な外見。

『あれが、封印されていた……ドラゴン』

茫然と眺めていたら、ドラゴンはクルリと舞うように大空を飛翔し、大きく翼を展開させた。次に見せた息を大きく吸い込む動きに、マリンさんが声を荒げる。

「いけませわッ！ あれは——」

いち早く感づいても、この時は打つ手が無かったと思う。何故なら、ドラゴンにその所作を許した時点で手遅れだったのだから。

ドラゴンが見せた深呼吸の仕草は、ブレスで大地を焼き払う時の基本動作。ワイバーンも火球を放つ際には、高空から狙いを定めるけれどあのドラゴンが放ったものは、ワイバーンなんかと比較できる代物ではなかった。

一言でいえば、稲妻？ いや、閃光か。もはや火の玉なんてレベルじゃないんだ。完全に別物。焼き払うなんてものじゃない。あれは滅すると見た方が正しいだろう。

アレが放った光は、自分が復活した場所と隣でそびえ立つ山の天辺を、えぐり取るように過ぎ去った。その更に遠くで、爆轟と共に赤い光の柱が立ち上る。

冗談じゃない！ 何なんだあれは！

「オルゲイツ家に遺された文献通りですわね」

背筋に冷たい汗が伝うなか、彼女が呟く。緊迫の表情で親指の爪を噛み締めながら。

「私は、あれを止める為に、そして止める力を持つ英雄の血を引く、あなたの所在を知ったからこそ、この地へと赴きましたのよ」

僕を真剣な眼で見据えて、彼女は発した。

「戦いなさいブレイブ！ あれをそのままにしてはいけない！」

『ヒツ！ ぼ、僕が？ む、無理だよ』

「あなたの力は、そのためにありますのよ」

や、止めてよ。いきなりそんなことを言われたって。僕は喧嘩すらやったことないのに。

「何を迷ってらっしゃるの！」

『出来ないよ！ そんな怖い僕には無理だよ！』

「これは義務よ！ 英雄の使命を血と共に受け継いだあなたの――」

『止めてったら！ いきなり来て、いきなり押し付けられて、はい判りましただなんて、答えられるわけじゃないか！』

そうだ。僕はこの姿に苦しむだけで、今日まで自分の存在意義すらも掴めず、ビクビク怯えて暮らしていた。それをいきなり、あんな化け物と戦う事が自分の使命だの義務だの言われて、納得しろだなんて。無茶苦茶もいいとこだ！

絶対に嫌だ。戦いたくない、戦えない。だから僕が彼女から目を背け、洞窟にうずくまることで目を背けた。

「竜が、あなたの住んでいた町へと向かいましたわよ！」

彼女が怒り声で発する……って、町だって！

転

「あの町には、あなたの知り合いがいるのではなくて？」

彼女の言うとおり、町にはみんながいる。親友のクルーゼとエイミーを初めとする町のみんなが、いつも通りの一日を送っている。

「竜は、片っ端から生き物を食らいますのよ。自分の餌として見定め、下手に滅さずにね」

もしかして、封印から解放されたばかりの竜は――

「きつと空腹でしょうね。腹を満たす為に、人々が暮らす町を狙ったのですわ」

『そんな……』

で、でも、町には戦士ギルドもある。自警団だってあるんだ。戦術ならいくらでもあるはずだよ。

「勝てると思いますの？ たかがちよつと強い程度の人間が、安っぱいちつぽけな知恵しか持たない人間如きが、軽く放った一撃で山を決るようなあの化け物に？」

うつ……地獄絵図しか描けない。嫌でも餌になる人々の光景が、頭の中であつさりとイメージされた。

「倒せるのは、今のところあなただけですのよ」

僕に何が出来るって言うんだ。戦い方も知らない僕が、あんな獰猛な奴をどうにかするなんて。でも、彼女の言うとおりなら、もし僕が何もしなければ……駄目だよ。無理だ。僕には出来ない。

ただ頭を抱え込んで、うずくまることしか、僕には出来ないんだ。

「……ブレイブ。よく、お聞きなさい」

堅苦しい沈黙が過ぎた頃、先程までのキツイ口調が嘘のように、穏やかな声でマリンさんは語り始めた。

「私は、あなたに戦うのは義務や使命などと言いましたわ。けどねブレイブ。どうするのかを決めるのは、やるかやらないかを選択するのは、飽くまでも“あなた自身”ですよ」

僕自身が、決める？

「その選択次第で、あなたが何を失うのか、何を得るのが決まる。でも、これだけはハッキリと言えますわ。目に見えない大切なモノは、失ったら二度と戻っては来ませんのよ」

目に見えない大切なモノ——命、絆、思い出。選ばなければ、何もしなければ、僕の大切なモノが、みんな消える。

クルーゼとエミリーが……みんなが。

「なあ、ブレイブ。お前、体は大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ」

「大丈夫じゃないよ。どう見ても風ひいてるじゃない」

咳き込む僕に懸念を送る二人に、僕は苦しいのをやせ我慢して答えた。心配かけさせたくなかったのだけど、それが余計に二人の懸念に拍車を掛けてしまったんだと思う。

二人は僕に大人しく寝るよう告げ、薬やら大きな毛布などを用意してくれた。

「こ、こんなものをいっただいどこで？」

「仕立て屋のおっさんに作って貰ったんだよ。前々から考えてたんだぜ、おっさんも」

「薬も、先生が大型の生物に効くやつを造ってくれたんだよ。はい、ブレイブ」

仕立て屋のおじさんも、薬屋の先生も、僕は知っている。苛められた時、仕立て屋のおじさんが一喝していじめっ子達に拳骨を食らわせて、追い払ってくれた思い出がある。

薬屋の先生も、僕が転んで擦り傷の痛みに泣いた時、わざわざ自宅から消毒液と塗り薬を持って来て、手当てもらった後、飴玉を貰ったことがあった。

お父さんが亡くなった日にも、来てくれたのを覚えている。

『先生と、おじさんが……』

『水で溶かしたやつだから、すぐに飲めるだろ？』

『う、うん』

タルいっぱいにつぎ込まれた薬は甘くて、飴玉の味を思い出した。
『ブレイブは寝てていいよっ！ 私とクルーゼで毛布はかぶせてあげるね』

かぶせてもらった毛布はとてもあったかくて、笑顔のおじさんに頭を撫でてもらった記憶が蘇る。

『二人ともありがとう。おじさん達にもお礼を言っておいてね』

『ああ、明日の帰りにな』

『明日の帰り？』

『今日は私達、ここで寝るから』

『そんな、いいよ。ここにいたら寒いよ』

遠慮する僕に、エミリーは頬を膨らませて指差した。
『だめよブレイブ。あなたを看病する人がいないと、病状が悪化したりしたら大変でしょう』

『で、でも。風邪をうつしちゃうかもしれないし』

『ばーか、ちゃんと予防を済ませて来てるっての。痛かったんだぜ注射。ま、うつっても町で治せるから大丈夫だよ』

『そうよブレイブ。だから遠慮せずに甘えて良いよ』

宥め聞かせるに言って二人は微笑んだ。この日の夜は、一緒に毛布をかぶって眠りについた。この時、僕は聞いたんだ。二人の寝言を。

『ずっと友達でいような。ブレイブ』

『ブレイブを、人間に戻して……神様』

二人は、嘘偽り無く僕のことを思ってくれていた。この事実だけで、目頭が熱くなるのを感じた。

そうだ。僕は、一人じゃ何も出来ないんだ。でっかい形をしてるくせに、多くの人々に支えてもらって、それでいて、僕は何一つ恩を返せてない。今、この瞬間、大切なモノが無くなるうとしているってのに。

クルーゼとエミリーが消える。お父さんやお母さんのように、僕の所為で、僕が何もしないから消える……嫌だ。嫌だ！

消えちゃ、いなくなっちゃ嫌だ！

溢れ出て来た、涙が。

“出来る出来ない”じゃない。“やるかやらないか”なんだ。気が付いた。そしてわかったんだ。僕がすべきこと、したいことが『マリンさん』

僕は、クルーゼやエミリーを、みんなを助けたい。口に出すことは出来なかったけど、僕は涙を拭って彼女を見据えた。

「良い。表情ですわ」

悟ったようにマリンさんは目を伏せて、小さな笑みを零す。安心しきった息を漏らすと、パラソルを閉じて彼女は黙っていた口を開いた。

「それじゃあ、行きますわよブレイブ」

『え？ マリンさんも付いて行くの？』

「当然でしょう。私は一言もあなた一人で戦えとは言ってませんわよ。それに、ロードレインとオルゲイツは二人で一つ」

そう言うなりマリンさんはパツと僕の目の前から消えた。同時に、頭にトンツと何かが乗っかってきた。

「オルゲイツの魔力無くして、ロードレインは本領を發揮できませんのよ」

『マリンさん？』

「安心なさいな。あなたを死なせはしない。私が、あなたを守る。一緒に戦いますわよ」

頭上から聞こえてくる声から、彼女が乗っているのか。湖に目をやると、僕の頭の上でまっすぐ佇むマリンさんが映っていた。

「さ、羽ばたきなさいブレイブ。今すぐあいつを追いますのよ」

そんなことしたらマリンさん落ちないかな？　なんて問い掛けてみると、魔力で僕に引っ付いているから大丈夫と彼女は答えを返してくれた。まあ、僕なんかよりもずっとしっかり者だし、懸念する必要はなさそうだ。

『それじゃあ、行くよ』

一瞬、深く屈み込み、そして僕は飛び上がる。勢いを殺さず、力強く翼を動かす。風を纏うように、乗るよう移動する。上昇し、そして下降で勢いを生み出して翼を広げて這うように舞い上がる。ツバメのように。

「あなた。思った以上にスムーズに動けますのね？」

『時々、夜中に飛ぶ練習はしていたからね』

でも、狩りとかはやった事がないんだ。だって、生き物を殺して食べるのには抵抗があつてさ。ウサギとかを狩りに来る人とかいるんだけど、そんな人に見つかないようにこっそりウサギを拾い上げて、人に見つからない、住み良い環境に移したりとかしてたっけ。いや、そんなことよりも今は竜だ。竜が降り立った町も見えてきたし、一刻も早く追いついて止めなきゃ。

滑空するなか、町を覗いてみれば黒い竜が時計塔を破壊しているのが目に入った。慌てて避難する人々が見える。マズい、あいつも襲い始めている。時計塔は町の外側に建てられているから、他の建物に被害が広がる恐れは無い。けど、ここからは学校が近いんだ。竜が片っ端から狙いを定める性格という以上、次に襲うのは校舎か。

『くそ、間に合え！』

僕は急降下して目的地を目指した。予想通り、竜は校舎を破壊し始めている。引つ掻いて最上階辺りを吹き飛ばしてしまった。校内の教室も丸見えに——って、エミリーとクルーゼがいる！

『な、何で！』

今日は学校が無いって言ってたじゃないか。見れば、他にも生徒がいる。

「補習授業でもやっていたのではありませんの？ 勉強熱心な子は成績が良くても受けに来ますわよ」

『呑気にそんな言ってる場合じゃないよ！』

早く助けないと、竜がもう一度校舎を引つ掻こうと振り上げている。エミリー達が危ない。でも、距離がまだある。これじゃあ間に合わないよ！

「間に合わないなら、間に合うようにすれば良いのですわ」

マリンさんは言うのと、僕の頭に手を載せた。すると不思議なことに、体中の力が漲ってきて、身が軽くなり加速も付いた。速い——これなら間に合う！

『やらせるかあッ！』

体当たりを食らわせ、怯んだ瞬間にもう一撃、顎を目掛けて頭突き。そしてラストは思いつきり振りかぶってからの右ストレートを、胸元へと叩き込んだ。

ゴムが弾けるような衝撃音が広がり、同時に竜は空中へ打ち上がる。最中に身を翻して、竜は翼を展開することで吹き飛ばされた勢いを殺す。僕と竜が暴れたことによって、この付近一帯に凄まじい突風が巻き起こる。

「いけませんわ！」

彼女が僕の頭から降りて前に飛び出し、空中にふわりと浮くと、両手を広げて詠唱を始めた。すると周りの建物や人、木や動物が淡い光の球体が包み込まれた。

『あれは？』

「あれは声以外なら、ある程度の障害を遮断する魔法障壁。あれな

らあなたが暴れても強風や衝撃の被害を最小限に抑えられますわよ」
僕に力を分け与えたり、空も飛べれば対象物を守るものまで。何
て便利な魔法を揃えいるんだか。でもおかげで安心できたよ。彼女
に礼を言わないとね。

「礼を言うのも、安心するのもまだ早くてよ」

『え？』

「過去のオルゲイツも、このようにロードレインのサポートを行っ
ていたらしいのですわ。そしてロードレインはまず竜と戦う為に、
最初は場所を選ぶ」

それはつまり、僕も先祖同様に被害を最小限に食い止める為、竜
を町の外側へと追い出さないといけないってことか。

「そういうことですわ。さ、判ったら行動を開始しなさい」

『ああ。やってみる』

「ブレイブ！」

ん？ 僕を呼び止める声がする。

後ろを見れば、半壊しつつある校舎の教室から、エミリーとクル
ーゼが僕に懸念の眼差しを送っていた。怪我は無いようだ。どうに
か無事に助けられて、本当に良かったよ。

『行ってくるね』

今度は僕が二人を、みんなを助ける番だ。そんな思いを胸に秘め
て、僕は二人に笑顔を向けた。

「……行ってこいブレイブ」

すべてを悟ったように微笑んだクルーゼが、小さくだけど、はっ
きりと僕の耳に届く声で言ってくれた。何でだろう。不思議なこと
にもう、恐怖は無い。それどころか勇気が湧いてくる。やれる気が
してきた。

僕は竜を睨み付け、翼を開いて飛び立った。

そうして、竜と同じ高度にまで上昇し、空中で停止。お互いに威
嚇の状態に入った。

「ブレイブ。竜が空腹である以上、倒すチャンスは今しかありませんわ。ですから、一気に勝負を決めますのよ」
『うん』

僕が仕掛けてくるのを察したのか、竜は妖しげな黒い光を放つ。次の瞬間、輝きに乘って禍々しいオーラの刃を放ってきた。

「来ますわ！」

迫り来る黒い影、刃を模したそれが隙間狭しと大量に、僕に目掛けて襲い来る。

「躲きなさい！」

『うんッ！』

刃をすべて潜り抜け、僕はそのまま竜へと突撃する。必ず倒す。みんなを守るという意思を抱いて――

結

攻撃の応酬が続き、遂に竜は痺れを切らして切り札を放つ体勢へと入った。もはや自分の腹を満たすのは後回しにして、僕と町を丸ごと消し去ろうとしている。

それを知って僕も黙ってはいない。対抗するために、僕も光を放つ姿勢に入った。

『いくぞッ!』

気を引き締めて、僕も正面のドラゴンと同じく、深呼吸の要領で魔力を口元に集束を開始した。奴の一撃に対抗する為に。

呼応するかのように大気が、大地が震え出す。魔力の影響が、僕を中心に波紋状に歪みが広がる。黒いドラゴンの方では魔力の影響で、大地に散らばる小さな岩がふわりと浮き、口元のエネルギーの塊に吸い込まれて粉々に砕かれていく。

これで、勝負が決める。

咆哮と共に、全身全霊の一撃が放たれ、光の閃光はぶつかり合った。僕と竜の間で激しく拮抗の火花を、波紋を広げる。

『なっ!?!』

くそっ、マズい。若干圧されている。光が徐々にこちらへと近付いて来る。力を全開にして放っているのに、このままじゃ……負ける。

もう駄目だ。やっぱり僕には無理なの？

「しつかりおし。拮抗している時ほど、勝利は諦めない者に傾くものですよ」

マリンさん……。

「それにね、ブレイブ。あなたは一人じゃない。あなたを支えている者は、あなたの後ろに沢山いるでしょう？」

後ろ……そうだ、町にはみんながいる。僕を今まで支えてくれたみんなが。

『行ってこいブレイブ』

クルーゼの微笑みは、きっと僕がやり遂げて無事に帰ってくるって、信じているからなんだ。

「そして今は私が、あなたのそばにいますでしょう？」

僕は、一人で戦ってはいいんだ。

『私は一言もあなた一人で戦えとは言ってませんわよ。それに、ロードレインとオルゲイツは二人で一つ』

マリンさんの言葉が、脳裏に過ぎった。

「私を信じなさいブレイブ。そして私を信じた自分に自信を持ちなさい！ そうすれば私が必ず切り開きますわ。あなたの進む道を！」

マリンさんを、自分を信じる……か。今まで自信を持って挑戦した事なんて、一度も無かった。いつも頭の中で失敗ばかりが浮かんで、その後の後悔が怖くて、前に踏み出せなかった。

けれど、今は違う。そばで一緒に挑戦してくれる人がいるから、自信を持てる。不思議と恐怖は無い。この自信は、僕だけのものじゃない。ロードレインとオルゲイツは二つで一つ。僕とマリンさんの意思が混ざり合ったものなんだ。

『だから、負けはしないッ！』

力が溢れてくる。迫り来る邪悪な光を、僕は押し返した。相手の

方は予想外の巻き返しに狼狽えている。

「今ですわよブレイブ！ 一気にいきますわッ！」

彼女は言葉と同時に膨大な量の魔力を注ぎ込んだ。その力を僕は内にため込めない。そのまま口元から放った光の波動へと魔力を流し込み、威力を増幅させた。僕の力も当然加わっている訳で、先程とは比較ならない輝きを放っている。

弾けるような思いを心の中で叫んだ。気持ちに呼応して、勢い付いた光の波動は邪悪な竜を瞬く間に飲み込み、空の彼方へと滑らかな軌道を描いて飛んで行く。

全てが過ぎ去った後には、竜の姿は何処にも無かった。

『……勝った？』

戸惑いを隠せず、僕は言葉を漏らした。

「安心なさいな。竜の魔力は完全に消滅してますわよ」

私達の勝ちですわ——そう、彼女が付け足す。正直、まだ信じられないでいるんだけど。そうか、勝ったんだ僕。あんな怪物を、倒せたんだ。

「フフ、ねえブレイブ。あなた最初何て言っていましたか、覚えている？」

『え？』

不意に、僕の頭から飛び降りた彼女が語り掛けてきた。最初に僕が言ったセリフ。それは確か……。

「僕には無理だ——ですわよ」

そうだ。僕は最初、自分に自信が無くて、失敗が怖くて、自責の念を重ねるのが嫌で、戦う度胸も無い臆病者だったはずだ。

けど、けれど——

「できたじゃありませんの」

パラソルを開き、彼女は澄ました笑みを浮かべた。何だろっ、不

思議と笑いが込み上げくる。胸の奥が熱くなつてく。報われたような、そんな気分だ。

『ありがとう。マリンさん』

「はい、どういたしまして。さて、それはよろしいとして。あなたの変身を解きませんかね」

え？ 僕の姿つて、変身してから今まで僕はずっとこの姿なんだけど。戻せるの？

「ずっとこの姿でいたのは多分、あなたが何らかのきっかけで感情が暴走し、魔力の制御が利かなくなった可能性がありますわね」

きっかけ……心当たりある。僕は一度、罪の意識に苛まれて、それに耐えられなくて悶え苦しんだ。あの、父さんが亡くなった日に「その様子だと自覚してらっしゃるようね。自分がこうなった訳を」
「うん。お父さんが亡くなった日に、僕は……」

マリンさんに全てを語ってみた。僕の抱えていた悩み、僕が勝手に抱え込んだ罪を。そしたらマリンさんは、そんなことかとばかりに苦笑してかぶりを振るうと、僕を宥めるような目で見詰めた。

「ブレイブ。よく聞きなさい」

一息付くと、彼女は優しく、諭すように口を開いた。

「私はね。小さい頃は父を憎んでいましたの——」

母が亡くなった時も、研究や政事に時間を費やす父を、マリンさんは憎んでいた。けれど、一番辛かったのは彼女ではなく。感情を押し殺してでも、憎まれても家族を含めた全ての為に頑張ってきた父の方だった。

母はそれを知っていたからこそ、父のことを許してあげると、彼女に言葉を残して世を去った。程なくして、父にも死が訪れた。僕のお父さんと同じく、過労によるものだ。

父は最期に、マリンさんへ自分の気持ちを伝えた。母が語っていたものとまったく同じ言葉。嘘偽り無い家族に対する深い愛情を、

マリンさんは知った。

「その父が、言っただけだよ。親というものは、誰よりも子を愛せるって。そして親は愛した子の為に、迷うことなく命を費やす。死を怖れなくなる。ブレイブ。あなたの父も母も、まさにそれではなくて？」

お父さんも、お母さんも僕の為に命を費やした。でも、やっぱりそれは僕の所為である証拠だ。

やっぱり僕は、僕は――

「親は罪を着せる為に、子を産んだのでは無くてよ」

「え？」

「私やあなたが背負うべきものは、罪ではなく“親の思い”ですわ」
「親の思い……」

「そう、だからブレイブ。つまらないわだかまりや業は捨てなさい。思いを背負い。あなたは、あなたの出来ることをして生きるのよ」

お父さんやお母さんの思い。それを背負い、生きることが僕のすべきこと……か。そういえばお父さんは最期に、僕の頭を撫でていたっけ。死に際なのに、苦しそうだったのに、優しく微笑んでいた。

いつも泣いていた時には、そうしてくれていた。本音を聞くことは出来なかったけど、今ならお父さんが僕に何を望んだのか、何となくだけ解る気がする。

『やってみるよ。マリンさん』

今からでも間に合う。自分の生きる意味と価値を見つけれられる。そう信じたい。

「よろしい。それじゃあ話を戻して、ブレイブ。あなたは今、自分で魔力のコントロールが出来てません。ですから、それまでは私が制御してあげましょう」

そうすれば、変身が解けて人間に戻る。言うなりマリンさんは、僕に右手を翳して呪文を唱え始めた。彼女の手の平から青白い光が

破門状に広がり、僕を優しく包み込む。みるみるうちに、僕の体が変化していく。

竜から、人の姿へと――

瞳を伏せ、魔法の力を受け入れて、一時の間が流れる。僕は、ゆっくりと目を開いた。目の前に映ったのは、目を丸くしているマリンさんの姿だった。

マリンさんが自分より大きく見える。って、人間に戻ったから僕の身長が縮んじやったのか。

うん、ちゃんと人の姿だ――しばらく竜のままだったから忘れてたけど。僕の体、大分成長しているなあ。胸もぺったんこだったのに、大人の女性くらい大きくなって……、何故に裸ツ！？

そ、そうか思い出した。竜に変身しちゃった時に破けてしまったんだ。

「あ、あのさマリンさん。服、というか隠すものないかな？」

さすがに同性とはいえ、目の前で身を晒すのは恥ずかしい。だからダメ元で頼んでみたのだけど。

「ま、マリンさん？」

さっきからずっと、マリンさんが強張った表情のまま、僕を見据えている。いったい何故？

疑問に思っていたら、マリンさんはいきなり胸を鷲掴むなり、血走った目で弄くりまわした。

「ちよっ！ 何するんですか！ い、痛いって！」

「ほ、本物。わ、私のより大きい」

「な、なんのこと？」

「あ、あなた。お、女の子でしたの！？」

え、何を今更。もしかして解らなかったの？

「わ、私はてつきりヘタレ少年とばかり思っていましたのよ」

ヘタレって、ひどいよ。

「それに、名前もブレイブってどう読んでも男の名前でしょうに。僕って一人称まで聞いたら誰でもそう思いますわよ！」

あ、あはは……まあ、確かに。もっともな指摘ですよねえ。

僕の名前って、生まれる前からお父さんが男の子前提で決めていたから。

男の子の服も既に用意していたんだけど、残念なことに生まれた僕は女の子な訳で、名前も一度決めたら変更できないって国の法に従い、結局僕の名前はブレイブとなってしまった。

お父さんはこれに関しては申し訳なく思っていたのか、よく僕に頭を下げてたっけ。同い年の子に、よく男女とかネタにされて苛められたけど、それでもお父さんを恨んだりしたことはなかったよ。

「はあ、あなたもけっこう苦労してますのね」

「環境が環境だったからね。もう馴染んだよ」

苦笑する僕に呆れ顔でマリンさんはかぶりを振るう。風が吹き、緩やかな静けさが漂うなか、僕を呼ぶ声がした。町の方角から、エミリーとクルーゼが駆け付けてくるのが見えた。

エミリーは僕が人間に戻った姿を見て、涙ぐんだ顔で駆け寄り、抱き付いてきた。戻って良かったと、何度も呟いていた。

クルーゼはクルーゼで顔を真っ赤にしながらも、明後日の方を向いて頬を掻いている。

そうだ。二人にも、マリンさんにも伝えたいことがあったんだ。言わなくちゃ。

「エミリー。クルーゼ。マリンさん」

みんなが注目したところで、頭を深く下げ、僕は告げた。

「ありがとう」

自然と、僕らの間に笑みが零れた。笑い声が大空へと響くなか、エミリーが気が付いたように、あっと声を出す。

「どうしたのエミリー？」

「ブレイブ。何で裸なの？」

へ？ あ、ああッ！ すっかり忘れてたああッ！

「ばッ！ 何で言うんだエミリー！。ここは黙っておくべきだろ」

何言ってるのさクルーゼ！ くそ、さっきの気恥ずかしげな態度はそういう理由だったのか。気付いていたクセに指摘しないで、人の裸をちらほら見ていたなんて。

「クルーゼエエッ！」

「いや、違うんだブレイブ。ま、待て、パラソル借りて何する気だ。ご、誤解だ！ 話せばわかっ——ぎゃあああ！」

それから町に戻った僕達は、みんなにこれまでの経緯を説明して、竜は今年から世界各地に出没するということ、英雄の血を継ぐ僕は旅に出て、竜を退治せねばならないということを打ち明けた。

みんなは、何も無理してそうする必要は無いと、心配して僕を呼び止めてくれたけど。もう、決めたんだ。

僕は、自分の出来ることをやるうつて。だからマリンさんと旅に出ることにしたんだ。世界を救うなんて大それたことが出来るなんて思っちゃいけないけど。それでも、僕のやることなすことに少しでも意味が生まれるのなら、やってみる価値は十分にあると思う。

かくして三日目の朝。

「それじゃあ、言ってくるね」

身仕度を終えて、僕とマリンさんは町の入口に向かった。門の手前では、エミリーとクルーゼが佇んでいた。出発の日は告げてない人知れず朝早く出るつもりだったのに、二人にはバレていたようだ。けれど二人は僕の意志を汲んでくれていたから、見送りに来てくれたのだろっ。

「気を付けてねブレイブ」

エミリーが満面の笑顔で言った。

「必ず帰って来いよな。お前の帰る場所はこの町なんだからよ」

「うん。また会おうね！」

旅への出発への見送り来てくれたエミリーとクルーゼに手を振り、僕はマリンさんと歩き出す。遠くの山へと続く道に沿って。

「ふと、思いましたのですけど」

「何？」

「あなた。その格好は何ですか！」

太陽が照らす蒼天を見上げていると、マリンさんがパラソルを突き付けてきた。

「私は確か女の子の服を渡したはずですよ。何で男の子の格好をしていますの！」

彼女の言うとおり、僕の服装はレザーのジャケットやブーツと、男性向けのデザインで仕上がっている。着心地よくて、僕としては馴染みやすいんだけど。

「あなた女の子ですよ。もう少しらしさってのを持たないといけませんわ。なのに何でそんな格好を——」

「いや、だってジーンズとかは動きやすいしさ。あんな短いヒラヒラのスカートとか、風が吹いたらめくれちゃうから……」

「おだまり！」

「いたっ！」

ベシッとパラソルで頭を叩かれた。痛くて涙目でなにすると視線を送る僕に、彼女は御乱心の様子。別に捨ててないし、ちゃんとバッグに詰めているから良いと思うんだけどな。

「そういう問題じゃなくてよ。まったく、どうやらあなたは一から女の子としての調教——オホンッ！ 教養を身に付ける必要がありますわね」

今、おぞましいこと口にできなかった？

「今日から私があなたの保護者——飼い主になる以上、ちゃんとしてもらいますわよ」

逆だよマリンさん。地が出てるよ！

僕にいったい何をする気なんだこの人は？

はあ、前途多難だなあ……。

「なんか言いました？」

「いや、何も言っていないよ」

「嘘おっしやい！ 何て言いましたの？ はっきりおっしやい！」

「な、何でもないんだってばあ！」

「こら、待ちなさいブレイブ！」

でも、悪くはないよ。これから始まる旅はきつと苦労の連続で、嫌なこと辛いことは沢山あると思う。けど、この人と一緒になら、乗り越えられる。今より強くなれる、そんな気がするんだ。

後ろを振り返って、口調は怒っているようでも楽しげに微笑みを浮かべている彼女を見て、僕は思った。

暖かい風が吹く、僕達の旅立ちに声援を贈るように、僕の金色の髪をなびかせる。

もう一度、曇り無き蒼い空を見上げて、僕は告げた。

「行ってきます」

終

結（後書き）

はい、読んでくれた方々どうもっす！

うーん、書いてみて思ったんですが。いろいろと至らぬ点が多かったと思います。

今後の執筆のプラスになれば良いのですが。とりあえず、最後まで読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2422p/>

目には目を、竜には竜を！

2010年12月30日15時55分発行